

興福寺東金堂院の調査(平城第640次南区)

2021年10月、にぎわいをとりもどした興福寺五重塔の南東で、かつての興福寺南面の区画施設の規模や構造に迫るための調査をおこないました。興福寺南面は、現在は石垣の上に木製の柵がめぐりますが、絵図や古写真では築地塀(瓦葺屋根をもつ土塀)がみえ、2020年度の調査でもその痕跡を確認しています。

調査を始めてすぐ、地表下30~40cmで、東西方向にのびる硬くしまった土の高まりを検出しました。この高まりを断面調査したところ、奈良時代の築地塀の積土と、後世に積みたした土とわかりました。また掘立柱の柱穴もみつかりました。築地塀の屋根を支えるための寄柱を立てた穴と思われます。築地塀本体の南端は調査区外にあるため規模は確定できませんが、現在の石垣上端を築地塀の南端と仮定すると、築地塀の下部幅は約2.7~3.0m(9~10尺)に復元できます。これは平城宮の外周の築地塀とほぼ同規模で、奈良時代の興福寺の壮麗さをうかがわせます。

また、高まりに掘られた柱穴や溝、礎石等も確認しました。これらは改修にともなうものとみられます。南面築地塀は、奈良時代の創建以後、数度の改修を受けながら位置を保ち続けたようです。

築地塀の北側からは、大量の瓦片、炭片等が出土しました。治承4年(1180)の南都焼討をはじめとする数度の興福寺堂塔の被災に関わるものとみられます。東西3m×南北4mの小規模な調査区でしたが、興福寺の激動の歴史を感じられる成果をあげることができました。

(都城発掘調査部 西田 紀子)



南面築地塀の高まりと柱穴(北西から)

平城宮西北部の調査(平城第642次)

今回の調査は、佐紀池にほど近い、閑静な住宅街が広がる平城宮西北部でおこないました。奈良文化財研究所では、平城宮内の調査を積み重ねてきましたが、今回の調査区周辺では調査の件数が少なく、いずれも比較的小規模な発掘調査にとどまっていることから、平城宮西北部の実態についてはほとんどあきらかになっていないのが現状です。

今回の調査区は75m²で、これまでの平城宮西北部の調査の中では比較的規模の大きい調査になりました。調査区の南部で、灰色を基調とした粘性の極めて強い粘質土が何層にも堆積した沼状遺構がみつかりました。土中からは木質遺物や葉が溜まった状態で出土するとともに、2点の木簡が出土し、うち1点は郷里制下の荷札木簡(養老元年(717)~天平12年(740))とみられます。

以上のことから、調査区南部の奈良時代の景観は、水の流れが澱んだ沼のような低湿地であり、調査区の東にある佐紀池が、調査区まで広がっていた可能性が考えられます。

いっぽう、調査区の北半では奈良時代の整地土を確認しましたが、顕著な遺構はみられませんでした。池あるいは低湿地が広がる岸部で、構築物をつくりにくい土地だったようです。平城宮西北部はどのように利用されていたのか、その実態解明に向けて、今後も少しづつ調査・研究を積み重ねていきたいと思います。

(都城発掘調査部 垣中 健志)



木簡2点が出土した沼状遺構(西から)